
山桜、散る

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山桜、散る

【Nコード】

N1276K

【作者名】

るうね

【あらすじ】

明里がさらわれた……。

あけさと
明里がさらわれた。

助けに来た山南は、まさに鬼神だった。小屋にいたごろつき十数人。それだけの数を、たった一人で圧倒した。いつもの優しい面差しは影もなく、ただ人を斬るためだけの機械であるかのように、明里には見えた。

全ての敵を斬り伏せた山南が、血で朱に染まった顔をこちらに向ける。いつもの温和な表情に戻っていた。

「大丈夫でしたか？」

「へ、へえ。山南はんは……」

「私なら大丈夫です」

そう言って、山南は淡く微笑む。それを見て、思わず明里は、ぽろりと涙をこぼした。

「私のせいで怖い思いをさせてしまいましたね、申し訳ない」

「いいえ、いいえ」

明里は、ただ首を振る。それを山南が優しく抱きしめた。

明里が監禁されていた小屋から程近い宿場の茶店で湯を借り、山南は身体についた血を洗い流した。明里もそれを手伝う。真新しい傷がいくつもあった。自分を助けるために負うた傷。それを明里は細い指先で優しくなぞる。

「痛いですよ」

「か、かんにんどうす」

「冗談です」

山南は笑いながら、衣服を身に着けた。

「駕籠^{かご}を頼んでおきました。一足先に戻っててください」

「山南はんは、一緒に戻らへんのどすか？」

「私は……」

その時、馬蹄^{ばてい}の響きが聞こえた。見ると、一頭の馬がこちらに近づいてきていた。馬上に、一人の青年。あれは、たしか……。

「やあ、沖田君」

「山南さん……」

沖田は山南と明里を交互に見比べ、複雑な表情で頭を振った。

「その顔だと、もう事情は知っているみたいだね」

「残念です。こんなことになって」

「自分の意思でやったことだ。悔いはないよ」

山南は温和な表情のまま、

「さ、縄をかけてくれ」

言って、両腕を差し出した

沖田が馬から下りる。鞍に掛けてあった縄を取ると、山南の両手首を縛りつけた。

明里には何が起きているのか、理解できなかった。命を賭して、自分を助けてくれた山南。その山南が同僚からの縄目を受けている。

「ど、どうして」

明里のつぶやきに、沖田が鋭い視線を彼女に向ける。

「あなたのせいだ」

視線と同じく、鋭い声音。

「あなたを助けるため、山南さんは無断で隊を離れたんだ。脱走、ということにされた。脱走は死罪。隊規で、そう決まっている。あなたを助けたせいで、山南さんは死ぬんだ」

死ぬ？ 死ぬとはどういうことだろう。山南が死に値するほどの、どんな罪を犯したというのか。

「黙っていないで、何か言ったらどうです。山南さんは……」

「もう止してくれ、沖田君」

沖田の舌鋒を、山南が遮る。

「私は、私の意思でやったのだと言っただろう。彼女を責めるのは筋違いだ」

山南は、明里に視線を向け、

「あなたは何も悪くない。気に病まないでください」

沖田が険しい表情のまま、馬に乗る。沖田に引き上げられ、山南も馬上の人となった。

去っていくその後姿を、明里が青ざめた顔で見つめている。

京に戻ると、すぐに明里は新撰組の屯所おとなを訪った。隊士の一人に山南への面会を申し出たが、すげなく断られた。それでも明里はあきらめず、自分の氏素性を明らかにして、どうしても山南に会わねばならない、会わせてくれないのなら、ここで死ぬ、とまで言った。その剣幕に、隊士も折れ、直接会わせることはできないが、と山南が幽閉されている一室の出窓まで案内してくれた。

太陽は西に傾き、夕闇が足元から忍び寄ってくる。明里は山南の名を呼びながら、激しく出窓を叩いた。障子が開き、山南が顔を出す。

「明里さん……」

山南は白装束に身を固めていた。死装束。

「なんでです？」

震える声で問う。

「なんで、山南はんが死ななあかんのどす？」

「沖田君も言っていたでしょう。局を脱するを許さず。その隊規を、私は破ってしまった」

「そないなこと、おかしおす。山南はんが隊を離れたのは、うちを助けるためでしょう」

「どんな理由であれ、無断で隊を離れば、脱走なのだよ」

「あのごろつきどもに脅されてたんと違いますか。他の人に漏らせば、うちの命はない、と」

困ったな、と山南は頬を搔く。

「あなたは聡明すぎる」

「やっぱり……」

「いや、それでもあなたが気に病むことはない。もともとは、私に原因がある。以前、あのごろつきどもと一悶着あってね。その時のことを恨んで、私を嵌めようとしたのだ。結果的には、彼らの思う通りになってしまったが。それでも、私は後悔していない」

「そないなこと……」

明里は格子越しに、山南の手を握った。

「逃げまひよ、山南はん」

目に涙を湛えて、言う。

「丹波に、うちの故郷があります。そこへ一緒に……」

山南はゆるゆると首を振る。

「それはできない」

「どうして……」

「それは、私が」

そこで、山南は言葉を飲み込み微苦笑を漏らした。

「さ、もう行きなさい。あまり長く話していると、あなたのためにならない」

「山南はん」

「さようなら、明里さん」

山南が障子を閉めた。取り残された明里。茫然自失の態で、窓から離れる。ふらふらとした足取りで、屯所の出口に向かった。

そこに立っていた。沈みきった夕日のかすかな残光を背に、一人の男。

「明里さんですか」

鋭い眼光に合わぬ丁寧な口調。

「新撰組、副長の土方といいます」

土方！

明里は戦慄した。その苛烈さから、鬼、と呼ばれる男。明里も、

噂で聞き知っている。それが、なぜ自分の前に姿を。

土方が、何か投げてよこした。短刀だった。

「山南は、今夜死ぬ。私が殺します。正確には、私の創った法が」
土方は、じ、と明里を見つめる。吸い込まれそうな、深い瞳の色。
「他の誰にも文句や異論は認めない。ただ、あなただけは。あなたにだけは、私を殺す権利がある、と思う」

のろのろとした動作で、明里は短刀を拾った。自分の身体ではな
いような、どこか別のところから自分の動きを見つめているような
感覚。短刀の切っ先を土方に向け、一步、踏み出す。二歩、三歩。
土方は動かない。直立不動のまま、ただ深い色の瞳だけが明里に据
えられている。

「なんで」

喉の奥から絞り出すような、明里の声。

「なんで、山南はんが死ななあかんのどす？ あの人、なんも悪い
ことをしてへん。それなのに、なんで。答えておくれやす、土方
はん！」

沈黙が降りる。やがて、土方がゆっくりと口を開いた。

「それは、あいつが」

『それは、私が』

「新撰組だからです」

明里は見た。鬼の副長、土方歳三の頬が涙に濡れているのを。氷
のような無表情のまま、ただ落涙している。

「あほや」

視界がぼやけるのを意識しながら、明里はつぶやく。

「山南はんも土方はんも、あほや。あほばかりや。もっと楽で利
口な生き方が、なんぼでもあるいうのに」

明里は短刀を取り落とす。そして、そのまま泣き崩れた。

その日のうちに山南は切腹を遂げた。見ていた者が感嘆の念を覚えるほど、見事な散り様だったと伝えられる。明里が、その後どうしたかは定かでない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1276k/>

山桜、散る

2010年10月8日15時20分発行